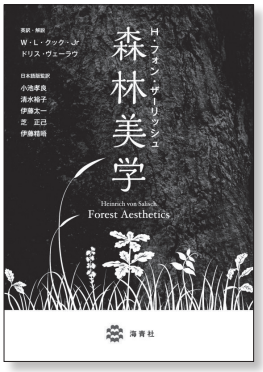

本学教員が関わった本

森林美学

H・フォン・ザーリッシュ 著
ウォルター・L・クック・Jr. ほか英訳・解説
小池孝良 ほか日本語版監訳
海青社、2018年６月

紹介者　髙　橋　絵里奈
（生物資源科学部 准教授）

『H・フォン・ザーリッシュ　森林美学』は、もともとはドイツ語で書かれた本でした。第１版から第３版まであり、原著は装飾文字で書かれた美しい書物だと伺っています。その第２版の英訳版を日本語に翻訳したのが、本書となります。誰しも、どうして最新版の３版ではなく、２版で、それも英訳本の日本語への翻訳なのかということを疑問に思われるでしょう。英訳を担当したウォルター・L・クック・Jrとドリス・ヴェーラウ氏による巻頭言を読むと、第３版は入手困難であったとのこと、また、原著があまりに古い表現で、古いアルファベットで書かれ、翻訳が非常に難しかったことが述べられており、ドイツ語の原著の英訳は困難きわまりない作業であったことが述べられています。その困難を克服してようやく英訳本ができあがったとのことでした。難解なドイツ語の書籍が、英語に翻訳されたことで、ようやく多くの英語を解する人が読むことできるようになったということになります。その英訳本の日本語訳をすることになったのは、北海道大学の小池孝良先生のご努力の賜と私は思います。北海道大学では日本で唯一「森林美学」の講義が開講されており、その担当者が小池孝良先生でした。日本では、1918年に新島善直と村山醸造各氏によって『森林美学』が著述され、今田敬一氏によってドイツ林学の展開の中に森林美学の位置づけが明らかにされました。その今田氏によって恒続林思想へ導かれた北海道大学の「森林美学」の講義を受け継いだのが小池孝良先生ということになります。つまり、翻訳の旗振り役の適任者がおられて初めてこの翻訳が動

き出したということになります。日本語監訳者としては、小池孝良、清水裕子、伊藤太一、芝正己、伊藤精晤、各氏と錚々たるメンバーが並び、北海道大学の学生、信州大学のグループ、京都大学のグループなどを含む41名の翻訳者が分担で訳を担当しました。その41名の中の１人がこの紹介文を書いている私となりますので、私がこの本を紹介するのは、ちょっと恐れ多いことかなと思っています。英語の翻訳であれば、さほどの困難は無かろうと思われるかと思いますが、この翻訳の話が来て、担当部分が配分され、各訳者の原稿が出始めたのが2008年と記憶しています。全ての訳者の原稿が揃い、内容が精査され、用語などの訳が統一され、出版に至ったのは2018年６月１日ですので、翻訳に10年以上の歳月がかかった大作となりました。

私は1998年に卒論のテーマとして吉野林業地の施業（森林管理）を選び、その後2007年に学位を取得し、現在に至るまで、森林管理の研究者として研究を行ってきました。私の研究のきっかけは、以下のような出会いがあったことに始まります。京都出身の私は、人工林といえば、身の回りにあった間伐遅れの暗いスギ・ヒノキ林でした。しかし、大学３回生の秋、先生が奈良県の吉野林業地での森林調査補助のアルバイトを募集されていることを知りました。すばらしい人工林があるので、是非にと先生に勧められて吉野林業地に初めて行きました。吉野林業地での森林調査の際に、初めて「これは綺麗！美しい！」と思う人工林に出会いました。こんな美しい人工林はどのように育成されてきたのか、どのような方々が関わってこられたのか、とても興味が沸きました。そんなとき出会ったのが、吉野林業地の森林管理をされている林業技術者であり、間伐選木（森林内で伐るべき木と残す木を選別する）の熟練技術者である「山守（やまもり）」の垰忠一（ありづかただかず）氏でした。私は単刀直入に「間伐選木の基準って何ですか？」と尋ねたのですが、垰氏は「まあ～長年の経験と勘ですなぁ～。」と答えられました。普通ならば、「そうか～。」と引き下がるところかと思います。しかし、私は、そうは言っても、何かを見て判断されているはずだから、何を見ておられるかがわかれば、真似できることも有るのではなかろうか、それを知りたい！と思いました。最初は大学生の娘さん（当時は！）が何を知りたいのかといぶかしがられていましたが、吉野林業地に通う度に森

林管理について熱心に尋ねる私に、垰氏はとても丁寧に森林管理の極意とも言える事柄を教えて下さいました。その後吉野林業地で多くの皆様に出会い、私の森林管理に関する興味は益々深くなりました。その垰氏に私は尋ねたことがあります。「垰さんにとって、美しい森林はどんな森林ですか？」垰氏は迷い無く「それは、人がちゃんと手入れをしている森林やなぁ。」と答えられました。当時の私は驚きました。当時の私は人手の入らない自然こそ美しいに違いないと思っていたからです。人手が入っていることが美しいとは思ってもいませんでした。

この本の原著者であるH・フォン・ザーリッシュは、ドイツの森林官です。日本とは異なり、ドイツの森林官は地域の森林の管理の指揮を執るのみならず、警察権を持ち、森林内で犯罪者を捕らえることもできます。森林官はドイツの子供達にとってあこがれの職業なのです。その森林官であったH・フォン・ザーリッシュは、序文で以下のように書いています。「林業芸術の目的は、経済的な森林管理を理想化することなのです。」「木材を利用することが目的ではなく、単に美と喜びのためだけに経営される森林は、林業芸術（または、クラウゼの言う森林芸術）には当てはまりません。」まさに垰氏がおっしゃっていた美しい森林と通じるものがあります。民藝運動を起こした柳宗悦が日用品に対して「用の美」があると言ったことにも通じるこの感覚は、国際的なものだったのか！と思いました。

この本はドイツの森林官が書かれた哲学書です。哲学書ですので、森林学を学んできた研究者にとっても、背景を全く知らない読者にとってもきっと難解ではあります。しかし、この本の中には宝物のような言葉がちりばめられています。美とは何か思いにふけりながら、自分にとって美しい森林とは何かを考えることができる良書です。